

たぐみ

Craftsmanship

特集 加藤陽子作陶展

第20号

アフリカ

その固有な文化と現状

東京オリピックの何年前から、駐留軍として来たアメリカ系黒人とは違って、もっと色の黒い、時に絞り染めの民族服を着たアフリカの人たちが商用などで来日するようになった。

その頃、三越の本店で二人のアフリカ人から持ち込まれたという展覧会があった。祭儀用の仮面や彫像、槍、楯や首飾りなどだが、たまたま濱田庄司先生と一緒に見るようになった。

先生はアフリカ美術にも詳しく、その素晴らしさやヨーロッパにおける評価についても一つ一つ教えて下さった。アフリカの文物に目を開かされた最初である。

ピカソやアポリネールが戦前これらの魅力にとりつかれ、自らの藝術に強い影響を受けたことも記憶に新しい。サハラ砂漠以南のいわゆるブラックアフリカの人々は、古代からアラブな

どのイスラム社会や東方のインド社会とも交流をもち、十五世紀にはヨーロッパとも交易があつて、金や象牙、香料などの貿易で栄えた都市や王国が多くあつたことが知られている。

だがアフリカ固有の文化とその繁栄は、近世以降欧米諸国による軍事的、経済的侵略によつて脆くも崩れ去る。そして第二次大戦後、多くの独立国家が誕生したとはいえ、そのほとんどがそれまで以上に石油やウラン、鉱物などの天然資源の収奪や国民の貧困、エイズなどの病気に苦しんでいる。

七月に、そのアフリカ諸国の債務の減免と貧困問題、エイズの撲滅をテーマにイギリスで主要国サミットが開かれた。しかしアフリカの悲劇のそもその根源が、民族の言語、風土、文化など歴史的な生存の条件を無視した欧米による支配、とりわけ自由主義経済の名の下に巧妙に仕組まれた再支配にあるのは明白である。サミットも茶番というほかはない。

(志賀直邦)



口紅小鉢三種



鎚手楕円皿



後手急須



筒花入

加藤陽子作陶展

たくみ企画展

会期 平成十七年九月十日（土）～十七日（土）

九月十一日（日）は営業いたしません。

会場 たくみ二階サロン

営業時間 十二時から十九時まで（日曜日・最終日は十七時半まで）

磁器の器づくりを志して

加藤 陽子

瀧田項一先生の元で修業を積み、独立築窯して十五年余りになります。私は短大では油絵を専攻し、卒業してからは地元の手描き友禅の工房で約三年仕事をしております。

その後、縁あつて宇都宮陶芸教室でお手伝いする事になり三年ばかり勤めました。そのうち磁器に惹かれ、丁度その頃、瀧田先生が烏山に窯を築かれたことを知りお訪ねしました。



口クロをひく加藤陽子さん

先生は沖繩藝大の教授をされていて烏山と沖繩の往復でお忙しかったのですが、幸いにも入門を許され、それから三年と三カ月修業させていただきました。

瀧田窯では磁器の粘土や釉薬の作り方から、口クロ、釉がけ、上絵付け、焼成にいたるまでひと通り学びましたが、まだ至らないところも多く今なお修業の毎日です。

独立してからは三年ほどを準備期間にあて、平成六年に大阪梅田の阪急百貨店画廊で初の個展を開かせていただきました。また日本陶芸展、日本民藝館展、国展にも入選し、多くの方の励ましをいただきながらより良い作品をと心がけております。

そしていま、仕事の難しさも知りましたが、何より作陶を続けていられる事に感謝しています。

見立ての茶器

白釉緑打ちかけ茶碗 (宗像窯)

近藤 京嗣

福島県会津若松市の近郊にある会津本郷焼の宗像窯は、東北地方で現在煙をあげている民窯の中で伝統を守りつつ新作品も作るなど最も堅実な仕事をしている。また今も昔からの場所にあ



抹茶碗に見立てた飯茶碗

る大きな登り窯を使つて焼いている。

東北地方の焼物は、飴釉とぬか釉、緑釉であり、ぬか釉は別名藁白ともいわれ、藁灰が主な釉であるが、宗像窯では藁ではなく岩石を使っているのので白釉とよんでいる。しかし釉の発色は殆ど同じである。

宗像窯で現在作られているものは、蓋物、鉢、皿などの大中小、酒器、花入、ピッチャーなど日常使うものが主である。また特色のあるものでは鯨鉢といつて、長方形でやや上に広がり、耳のついた鯨専用の漬物鉢がある。その他に飯茶碗がある。

釉は飴と白の二種あつて何れも無地、形は朝顔形あるいは井戸形と呼ばれているもので、極めてあたりまえなものである。肉も適度に厚く、やや外

に張り、高台も瀬戸の茶碗と同じ削りで、竹の節とか兜巾(ときん)もない単純なものであるが何ともいえぬ力強さがある。

ただ釉は同じでも登り窯なので火の当り具合や置いた場所によつて温度差や灰がかかつて思わぬあがりのものが出たりするので、同じ飯茶碗でも一つ一つ異つた趣がある。

その中から抹茶碗に見立てたのが写真の茶碗である。カラーだとよくお解り頂けると思うが、これを見る方は本郷のなまこ色は想像がつくと思うのでご勘弁願いたい。

茶器を見るときの心得として「先ず姿」といわれる。味とか景色より先ず形ということである。この茶碗、形が良くばつと眼についた。手にとつて見ると白釉がなまこ色に発色し、少し火に強く当たつたため白釉が少しとんで茶碗の縁から一センチ程下がつた辺りからのなまこの釉が美しい。それは上が薄く見込みに近づくとつれ濃くなり、

見込みは釉のたまりが半分不透明な青味を帯びた何ともいえない色である。

よく見ると釉が見込みに流れ、ろくろ目にたまり、紅味を帯びた紫色が流れて従ってみえる。見込みは月に群雲を思わせる。外は腰高な裾に釉がたまり、一ヶ所かけた緑釉がなまこ釉と混

酒井美智代著「山に生きる」を読んで

藤田 邦彦

じり、裾から見所宜しくよいところで止まっている。私の高麗茶碗の持ち始めが北鮮の会寧であるがそれに共通したものがあり、この茶碗との出会いを喜んだ。高台の内側には、亮の印が目立たないように押してあった。

(茶道研究家)

この六月『山に生きる 芋の里から送る「手織り通信」の十年』が発行された。

酒井さんは、福島県の昭和村というところに住んでおられる。大変な山中で、巻末の地図を見ると、村に通ずる道のうち南からのほとんどが「冬季通行止」と記されている。十一月には雪が舞い始め、三月までは雪の中である。そして「車と家との雪堀で村中の人が疲れはてている。」「このごろ村の話題は入院とお葬式ばかりです」というのが村の有様である。

この先いつまで集落を維持していくか。誰にもわからない。そういう村で酒井さんは、ご両親と三人、田畑を耕し、季節ごとの行事を執り行い、村付き合いをし、芋(カラムシ)、麻を作り、それを續んで、いざり機で布を織っている。

機織で生計を立てている訳ではない。「麻の機織と農作業の板ばさみで、どうしていいかわからなくなった私

「昨夜は澄んだ空に大きな月が上がっていく美しい月の出をみて、通信書く日だなと思いました。」：と、酒井さんは書いています。「手織り通信」の一〇一号である。この通信は、一九五年(平成七年)の夏、東京で手織りの展覧会をしたことがきっかけで、寄せられた手紙の返事として始まった。月に一度、満月の日を目途に書きつづけて十年、一二〇号を数えることになった。

どうして、満月なのかというと「私は何日何曜のない暮らしなので日付は忘れるかも知れないけれど、月の満ち欠けは見落とさないだろう」から、という。カレンダーと時計が示す数字を時間だと決めている人間には縁のない感覚で、こういう時間をいきている人がいまもいることにまず驚かされる。毎月の「通信」を読んだ読者たちは、これを自分ばかりが読むのは惜しいと考えた。渋る酒井さんを説き伏せて、



『山に生きる』の表紙

は、ある日いきなり白髪になってびくりしました。機織をあきらめて中断しました。我が家で最優先しなければならぬのは、食料の確保なのです。自給自足の食べ物があるから、収入がなくても生きていられるのです。機も織れるのです。「家族が健康で平穩無事な暮らしができて年に一反麻苧が織れたら、私には上出来の気がします。」というのが酒井さんの現実である。

という、このことを嘆いているのではない。むしろ、こういう生活が昭和村の元からの生活であった。機織りは特別のことではなく、日常生活のなかに当たり前のものとしてあった、と

いうことを繰り返して書いています。

この地域は、古くから越後上布の原料、苧の生産地であった。同時に、会津地方には袴を着用する習慣が近年まで残っていたことから、袴地の生産地でもあった。親子代々にわたって優秀な苧や麻の品種を選抜固定し、自分の畑に適した栽培方法を確立し、糸積みと機織りの技術を練磨してきた。それらの全過程がむらの生活にすっかり組み込まれていた。

「私の受け継いだ技術は深く自然と関わりあっていて、そのことだけを取り出して成り立つものではありません。いろいろな技術を日常的に守り伝えてきた昔ながらの生活をしなければわからないこと、できないことばかりでした。」

…逆にいえばこれは、昔ながらの生活が失われたとき、それを基盤とする機織りも姿を消す、ということである。時代の変化はすさまじい。この昭和村でも麻の栽培者はほほいなくなり、い

ざり機を織る人も十人いない、と書いています。しかし酒井さんはここに踏みとどまり、「本物の仕事をできるだけでなく形にしておくことが自分の役割だ」と決めて、昔と同じ機を織り続ける。

たとえば、日本民藝館展に出品した袴について、「麻経に緯苧の袴地を織ろうと糸を準備しました。麻と苧で織る上布もこれつきりでしょう。細い糸を績める麻が絶えました。…無理強いしても私は最後の袴を、今、ここに残った染織技術の証として、きちんとしたかたちで記録と実物とで知らしめたいと思いました」と言う。振じり（モジリ）織りについて「いざり機は平織りでさえなかなか思うように織れません。振り織をするのはもしかしたら私だけになっていくかもしれない。」と書く。

さらに、このような機織のことがばかりでなく、自分の生活とその周辺のことを、臆することなく隠すことなく書き綴った。農作業や山仕事、季節や天

候の移り変わり、年中行事とその食事、
村の施策「からむし織の里」事業等々、
ここに記されたことごとくが、当事者
による山村の生活文化の貴重な記録で
あり、その変貌の報告である。
「黄砂が雪景色を一変しました。赤い
雪が降り、害虫がわくと春になりま
す。」「今年初めて燕が家に来ました。

展示会予告

第十二回島岡達三師弟展

会 期 平成十七年九月二十四日(土)～二十九日(木)
九月二十五日(日)は営業いたしません。
会 場 たくみ二階ギャラリー

出品作家

島岡達三 島岡龍太 土屋典康 松崎健 五十嵐俊樹
宮島正行 明賀孝和 浜田英峰 福田るい 川上真悟
前山幸弘 岡田崇人 筆谷桂

師弟展に寄せて

たくみでの師弟展も十二回となり、始めは数人でスタートしたのが今や十名を越える数となった。最初の弟子は中堅の域から大家になりつつある一方、卒業したばかりの初々しい新人も居る。夫々が自分の作風の確立を目指して努力している姿は、師である私にとっては何よりもうれしくて楽しみである。

平成十七年九月吉日

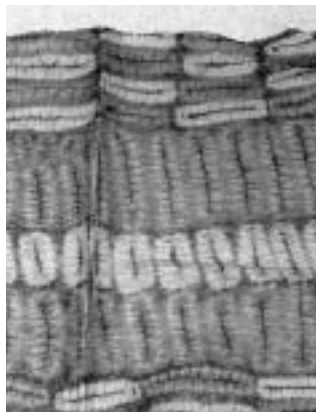
島岡 達三

米粒をまいて迎えるのが慣わしです。」「
「苧畑こしらえの目安は、藤の花が咲く頃と教えられている」「せんまい干せねえ年ア秋空も悪いツちゅうぞ」「色づいた風景は美しいですが、ちらと見たこれらの言葉の美しさはどうだろう。これらの言葉は、酒井さんの暮らしそのもの、長い長い時間を堆積した昭和村の生活のかたちそのものである。この暮らしがいま消えようとしている。愛惜の思いを禁じえない。

柳田國男が、「遠野物語」で、「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」と書いたのは、はるかむかしのことだが、この本を読んでわたしは、なにかそういう感じに捉えられた。

(東京民藝協会会員)

『山に生きる 苧の里から送る「手織り通信」の十年』／酒井美智代著／大河書房刊／定価二〇〇〇円＋税／ご注文は日本民藝館売店またはたくみまで



椰子布 (部分)

この部族は男性のお洒落で有名です。首飾りは、右はトゥワレグ族のもの。が、写真の布はラファイア椰子の繊維を筒状に織った腰巻で、絞り染めの模様がなんとも美しいものです。パウレ族のものといえます。

たくみ歳時記 アフリカの 椰子布と首飾り

左の三つはエチオピアのコプトクロスといわれるもの。エチオピアは最も古いキリスト教国のひとつ、その様式は古格を伝えていきます。なお芹沢銈介先生蒐集によるエチオピアのイコン(聖像画)、礼拝具、クロスなどが、今夏九月六日まで、静岡市立芹沢銈介美術館で展示されています。(S)



左3点 15,000円、右1点 16,000円

あとがき

沖繩タイムス社の元会長豊平良一氏が七月二日逝去され、葬儀が那覇市の護国寺で、五日に執り行われた。沖繩各界や本土からも参列、盛大であった。豊平さんは先代の豊平良顕氏の時代から民藝運動の良き理解者であり、本土の工藝家でお世話になった方は数知れない。上京された折には必ずたくみに寄られ歓談するのを楽しみにしておられた。心からご冥福をお祈り申し上げます。

今号に執筆いただいた近藤京嗣氏は裏千家の茶道家、若い頃民藝館に勤め、柳、濱田両先生の元で地方の民窯の調査、蒐集を手伝われた。「民器の中の茶器」などの著作がある。(S)

発行 株式会社たくみ
東京都中央区銀座八一四―二
発行責任者 志賀直邦
電話 〇三―三五七―二〇一七
FAX 〇三―三五七―二一六九
振替 〇〇―一〇―二一三五六五九
定価 六〇円(税込)